

私の帰る処（二人芝居）

私の  
帰る  
処  
（三人  
芝居）

いし  
ざわ  
みな

登場人物

齋藤枇南子（さいとう・ひなこ） 五〇歳

小川陽花（おがわ・ようか） 四五歳

【第一場】

二〇一六年、早春。東京都内の古い民家。

かつては応接間であったのだろうと思われる部屋に、この家の二女、小川陽花がトランクと大きめの鞆を持って入ってくる。荷物を置きながら感慨深げに部屋を眺め、やがて窓ガラス越しに庭を眺める。

長女、齋藤枇南子が、盆に紅茶とミルクポット、砂糖を載せて入ってくる。

枇南子 ちよつと寒い？ ストーブ持ってくる？

陽花 全然平気。向こうの寒さに比べたら。

枇南子 （微笑んで、盆をテーブルに置く）

陽花 枇杷の花咲いてた？

枇南子 枇杷？

陽花 見てないの？

枇南子 見てない。

陽花 なんで？

枇南子 わざわざ見ないわよ、枇杷の花なんて…

陽花 自分の花なのに？ お父さんが聞いたら哀しむわよ。

枇南子 見てなくても咲いたのはわかるわ。甘い香りがしてたから。

陽花 あの香りねー（懐かしい）見たいなあ！ 枇杷の花。

枇南子 ちよつと遅かったわね。

陽花 （紅茶茶碗を見て）これ、懐かしいー まだあったのね。

枇南子 （テーブルの上に紅茶茶碗、ミルクポット、砂糖を置きながら）ごめんなさいね。取り込んで。前からの予定だったものだから…

陽花 こちらこそ、急でごめんなさい。ボランティアみたいなもの？ 子ども食堂だっけ？

枇南子 （うなづく）食事するだけなんだけどね。とりあえず、どうぞ。

陽花 いただきます（紅茶を一口飲む）

枇南子 あちらのご両親はお元気？ 私も一度はお見舞いにといいながらなかなか行けなくて、ほんとうにごめんなさい（頭を下げる）。

陽花 こちらこそ、お父さんのことなにもできなくて申し訳ありません（頭を下げる）いいの。たぶん仮設になんか来られたくないから…

枇南子 あんな大きなお家に住んでらしたんだもの、辛かったでしょうね… よく憶えてるわ。裕一さんのお母様が丹精されたお庭が素敵で！ 葵の花の下に大きなキュウリがなっていて、雨蛙がいたのよ…

陽花 お姉ちゃん、東京に連れて帰りたいって言って、みんな呆れてたのよね。

枇南子 どうなっているかしらね、あのお庭…

陽花 私ね、父が泣くのを、初めてみたの。

枇南子 ……

陽花 仮設で、ユニットバスを見た時。

枇南子 ……

陽花 なんにも悪いことしてないのに留置所に入れられたみたいだって…

枇南子 ホテルもそうだけどね。

陽花 ほとんど福島から出たことのない人達だから。

枇南子 そうだねー

陽花 サダハルの部屋より狭いって。

枇南子 さだはる？

陽花 お父さんの犬。小川貞治。可笑的でしょ？

枇南子 可笑的い。

陽花 （思い出して）お姉ちゃん！ 父も母も仰天してたわ

枇南子 （なに？）

陽花 お見舞い金！ いくらなんでも多すぎるでしょ？ 大丈夫なの？

枇南子 ……あれはお父さんがね。私も多すぎるって言ったんだけど、譲らなかったの。

陽花 （驚く）お父さん、私の状況理解してるの？

枇南子 今はダメだけど、あの頃はね。「とにかく陽花が大変だから、色々言っても先立つものはお金だから」って…

陽花 （涙ぐむ）

枇南子 あとでゆっくり話すわね。あなた、お昼は？

陽花 お腹ペコペコ！ 東京駅からまっすぐ来たのよ。色々美味しそうな店が出来たけど、もしかしたらちらし寿司があるかとも思っ…

枇南子 もう、いつもぎりぎりの連絡なんだから… 昨日慌てて献立変えたのよ。せっかくだから子どもたちにも食べさせようと思って。

陽花 あるの？ ちらし寿司？ 嬉しい！

枇南子 大皿に盛ってね、魚肉ソーセージを桜の花びらに見たてて散らしてみたら悪くないのよ。年長さんくらいの子もいるのよ。いっしょに食堂で食べない？

陽花 （躊躇して）今日は遠慮しとく。

枇南子 そう？

陽花 ごめんね。

枇南子 じゃここへ持ってくるわね。いつまでいられるの？

陽花 （あらたまつて）…少し長くいたい。構わない？

枇南子 あなたの家よ、いたいだけいいじゃない。

陽花 ありがとう！

枇南子 お母さんの三回忌が最後だから（数える）六年と五か月？

陽花 信じられないわ… お姉ちゃんと六年半も会ってなかったなんて… お父さんも。

枇南子 あんなにしょっちゅう帰ってたのね。

陽花 去年、お母さんの七回忌にはなにがなんでも来るつもりだったのよ。でもあっちのお母さんが骨折しちゃって、裕一も出張だったし…

枇南子 もういいの？

陽花 すっかり！ やっぱり齡とつてもよく動いてる人は回復が早いのね。

枇南子 今は別々に暮らしてるんでしょう？

陽花 うん、県内って言っても海岸の方と内陸じゃちがうからね… お父さんたちはできるだけ近い所にいたいよ。でも裕一の仕事があるし… でも私が行ったり来たりすればすむことだから。

枇南子 裕一さん、一人にして大丈夫なの？

陽花 全然大丈夫よ、なんでもできるから。

陽花の携帯電話が鳴り出す。

陽花 （発信者を確認め）噂をすればだ…

枇南子 相変わらずラブラブね。じゃ、持ってくるわね、（出て行く）

陽花、電話に出ようとせず、紅茶をもう一口飲む。

陽花 まずっ…

枇南子、ちらし寿司と吸い物を載せたお盆を運んでくる。

枇南子 陽ちゃん、今見たら私にも携帯に裕一さんから着信があったの。かけた方がいい？

陽花 いいいい、私のことお願いしますって挨拶だけだから。

枇南子 大丈夫？

陽花 「お姉さんによろしく」って言った。

枇南子 （うなづく）

陽花 ねえ、これなんの紅茶？ 最近はこんなの飲んでるの？

枇南子 （苦笑い）ごめんなさい！ スタッフさんたちと飲むときの使っちゃったの。ごめんねー

陽花 ……どういふものなの？ 子ども食堂って。

枇南子 ほら、子どもの貧困が問題になっているでしょう？ 家で食事が摂れない子がいてね、給食だけが頼りなのよ。それで月に二回、土曜日にここで食事をつくって、そういう子ども達とみんなで食べているの。

陽花 この辺にもいるの？ そんな子が？

枇南子 ええ… 私も最初は驚いたけど、母子家庭だったり、外国人だったり色々ね。貧困の問題じゃなくてネグレクトに近いようなものもあるし…

陽花 許せないわね！

枇南子 微々たるサポートだけどね。

陽花 費用は？ お姉ちゃんが全部持ち出しで？

枇南子 まさか（笑う）あなた知ってたかしら？ 昔私が教えた子で、飯泉かなた君ってすごく優秀な子。あなた君のお母さんが以前からそういう活動されててね。少しでも企業からの寄付もあるし、あとは街の人たちからカンパを集めて… もちろん私も出しているけど。荷物、上にあげた方がいいわね。

陽花 （割り箸をもてあそびつつ）あたしの部屋でいい？ いつからやってるの？

枇南子 去年の夏。まずは試験的に夏休みだけと思って… そしたら思いのほかたくさん来たのね。それで、今は月に二回にして…（気づいて）お箸ごめんね、今日はそれで我慢してね。

陽花 （微笑）

枇南子 二時くらいには終わるから、ゆっくりしてて。

枇南子、出て行こうとする。

陽花 （慌てて）食べたからお父さんどこに行ってきたいの！ 電車だどうやって行くの？  
なんて名前だったっけ？

枇南子 ……

陽花 お姉ちゃん？

枇南子 明日、いつしよに行きましょう。

陽花 あしたあ…

枇南子 今から行ってもゆつくりできないでしょ？ 買い物頼まれてるの。お花も買って行きたいし… お父さんにお土産は？

陽花 （呆然）買ってない。

枇南子 じゃあ、なにか買ってらっしゃい。ついでに美味しい紅茶も買って来てちょうだい。

陽花 ……わかった、そうする。ダーズリンでいい？

枇南子 （微笑む）お願いね。

枇南子、出て行く。

陽花、気を取り直すようにちらし寿司を食べるが、これも馴染んだ味と違っており、落胆する。原因を探るように、米粒や具を凝視し、ゆつくりと咀嚼する。

再び、携帯電話が鳴る。

陽花 もしもし？ ……そうよ、他に行くところなんてないでしょ？（間）ずっと言おうとしてたの！ 聴こうとしなかったのはそっちでしょ！（間）お母さんには、ちゃんと話しました。大丈夫だから、ゆつくりしてらっしゃいって言ってくれました。（表情が険しく、哀しくなっていく）あたし、母の七回忌にも帰れなかったのよ。お父さんのことだって、ずっとお姉ちゃんに任せっぱなしなのよ。（間）去年の十月。言いました。（呆れたように）十三回忌の前に七回忌があるの！ そんなことも知らないの？（間）仕方ないわよ！ ずっと言ってるじゃない。家は母が一人っ子だし、お父さんの兄弟も亡くなってて親戚が少ないのよ。海外に住んでるわけじゃないし、いつまでも震災のせいにしてられないでしょ？（間）聴いてるわよ。（間）ちょっと、お姉ちゃんによけいなこと言わないでよね！ 言ったらずっと帰らないからね！

陽花、感情的に携帯を切る。が、再び鳴り始め、驚く。

陽花 まだなんかあるの？ ……？ りさこって… リンちゃん？ やだビックリ！ 元気だったあ？ ごめんごめん、ちよっとダンナともめたの。（間）そうそう、またかけてきやがったと思って（爆笑）ごめんねー！ でもよかったー そう、新幹線で。

アドレス変わってたらどうしようかと思ってたの。（間）そう、さっき着いたところ。  
この後？ いいの？（間）嬉しい！ ランチ楽しみー（間）ほんとは父の所へ行きたいんだけどね… ずっと会ってないのよ。でもお姉ちゃんが明日にしるって…（間）  
そうだよね！ えーとね、確か… フローレンスクラブだったかな？ そうそう！  
ありがとう！ うん、大丈夫。（間）わかった、じゃあ駅のロータリーで待ってる  
ね。後でねー（切る）

陽花、吸い物を飲むが、一口でやめて箸を置いてしまう。じつと、ちらし寿司を覗  
んでいる。

思い立ったようにスーツケースを運び出し、やがて戻ってくる。

バッグを開け、化粧ポーチを取り出し、口紅を塗りなおし、化粧を点検する。持ち  
物を確認し、時間を確かめる。

枇南子、少し慌てた様子で入ってくる。

枇南子 陽ちゃん、どういうことなの？

陽花 それはこっちの台詞。どういうことなのこの味は？

枇南子 （慌てて）なにかへん？

陽花 その辺で売ってるふつうのお酢使ったでしょ？ ゴマも炒ってないでしょ？

枇南子 なんだ… 驚かさないでよ。

陽花 斎藤家自慢のちらし寿司が安っぽい味になっちゃって… がっかり！（割り箸を屑籠  
に放り投げる）

枇南子 大げさね… あなた、家出したんですって？

陽花 お姉ちゃんみたいな人でも、一人になると暮らしの質が落ちるのねー

枇南子 （堪えて明るく）何人分つくると思ってるの？ 予算も限られてるのよ。あなたに出  
すためにこしらえたんじゃないんだから…

陽花 じゃあ出さないでよ！

枇南子 （驚く）どうしたっていうの？

陽花 私のために作ったんじゃないなら、出さないでよ！ 外で食べて来いって言ってよ！



枇南子 ……

陽花 六年ぶりに里帰りしたのよ。

枇南子 だったら前もって、もっと早く連絡すればいいじゃない。前の日になって言われても…

陽花 突然帰りたくなったのよ！ いけないの？

枇南子 いけなくはないわよ。でもこちらの事情もあるって言ってるの！ 昔みたいに我儘は通らないわ。

陽花 なによ。お父さんの世話するのしんどくなったからって施設に入れて、なんで他人の世話しなきゃならないのよ！

枇南子 陽花！ なんてこと言うの。一日に一食、それもカップラーメンとか菓子パン一つなんて子がいるのよ。あなた仮にも教育に携わっている者として恥ずかしくないの？  
陽花 ……もう携わってないわよ。幼稚園閉鎖しちゃったもん。いつ再開できるかわからないし…

枇南子 だって、近くの幼稚園で採用してもらえたって…

陽花 （遮って）去年の春だったわよね？ 施設に入れたって… あたし、本当は嫌だったのよ。お父さんが施設だなんて… でもあたしは帰ってお世話できるわけじゃないし、お姉ちゃんができないって言うんなら仕方ないと思って…

枇南子 ……

陽花 なのに、ボランティアって… お姉ちゃんって、昔からそういうところあるわよね。

枇南子 そういうところって？

陽花 他人には優しく、身内に厳しいのよ。昔からそうよ。あたしが小学校に入学した時、お姉ちゃんは生徒会長で…

枇南子 そんな昔…

陽花 お姉ちゃんは下級生に優しいってみんなが言ってた。友だちにも、羨ましいって言われた。でもお姉ちゃんは、いつもあたしを置いて登校しちゃって…

枇南子 だって陽花に合わせてたら間に合わないもの。生徒会長だから遅刻できないでしょう？

陽花 給食だってそうよ！

枇南子 給食？

陽花 ユキちゃんには優しくして、無理して食べなくてもいいよって言うのに、あたしには残すなっ…

枇南子 （思い出す）あれは、あの子は体が小さくて吐きそうにしながら食べてたのよ。あなたは好き嫌いが多くて…

陽花 （遮って）何が子ども食堂よ！ 私の家を勝手に使わないでよ！ だいたいそんな時間があるなら、一回くらい福島に来てくれたっていいじゃない？

枇南子 だから、さっきも言ったでしょう？ それは申し訳なかったと思ってるわ。でもね… 妹が被災したのよ。よその子助ける前に、自分の妹助けなさいよ！

沈黙。

陽花 裕一がね、家を建てるって言うの。

枇南子 ……  
陽花 当然よね、両親にこのままマンション暮らしさせるのは忍びないし、もともと親が建てた家に私たちが家賃も払わず住んでいたんだから。

枇南子 偉いわね、裕一さん。

陽花 エライわよ。そのために、慣れない土地で朝から晩まで働いて、疲れ果てた顔して帰って来て、ゆっくり話す時間もないの。もううんざり… 前の暮らしに戻りたい。でも戻れない。……わかってるの。家を建てるって気持ちだけが彼を支えてるのよ。だから何も言えないの。

枇南子 辛いわね、あなたも…

陽花 誰にも言えないけど、あたしが大学生だったら… 福島で働いてるだけだったらっと思ってしまうの。

枇南子 ……

陽花 自分でも驚いちゃった。結婚して二〇年も経つのにね。福島に骨を埋めるんだと思っていたのに… ずっと東京に帰りがかった… すぐ帰りがかったの。でも帰れなかった… 帰ったらもうあつちに戻れないような気がして…

枇南子 陽ちゃん…

陽花 でも東京に着いたら、なんかイライラするの。こっちではなんにもなかったようにノホホンと生きてる… 福島の原発は東京のためにあるのよ。なのに東京の人は味方じゃない… お姉ちゃん、この気持ちわかる？

枇南子 （うなづく）

陽花 この家売ってくれる？

枇南子 ……？

陽花 この家売って、生前贈与で私の取り分をください。現金が欲しいの。裕一を楽にさせたいのよ。そのお金で家を建てるわ。そうすれば彼もあんなに無理しなくてすむもの… 明日、お姉ちゃんからお父さんに話してくれる？ お願いします…

枇南子 （言葉が出ない）

陽花 私、ちよつと出かけるね。友だちから連絡があったの。ほら、短大の時のリンちゃん！ 憶えてる？ 披露宴でモー娘。やってくれた… あれでも今は副園長なんだって。すごいよね！ ランチご馳走してくれるっていうから行ってくるね。

陽花、出て行く。

枇南子、崩れるように腰を下ろす。そして、放心しつつも、手は残った食事を片付けないながら、じつと耐え、今起きていることを理解しようと努めている。やがて立ち上がり、庭を眺め、カーテンを閉めて、部屋を出て行く。

## 【第二場】

昼近く。

かつては応接間であったのだろうと思われる部屋に、枇南子が小さな花瓶を持って入ってくる。花瓶をテーブルに置き、カーテンを開け、庭を眺める。

ふと本棚に置かれたアルバムに目が留まる。枇南子、アルバムを手に取り、腰を降ろし、亡き母が好きだった花に語りかけながら、アルバムをめくっていく。

枇南子

陽花、可愛かったわねー 可愛すぎてみんなで甘やかしたわね。ほらこれ、生まれたばかりの時に紫陽花の前で写したの、お母さん若い。（間）紫陽花が多いね。これは四歳くらいかな？「これが陽花の花よ」って教えてね。幼稚園のお迎えもよく行ったなー これ、枇杷食べてる（笑） 陽花は枇杷が好きだったね…

間。

枇南子

：お母さん、私大丈夫かな？ ちゃんとやっていけるかな？（間）お父さんにはお母さんがいる。心の中にお母さんが生きているから、私や陽花のことを忘れても、自分を忘れてはいない。陽花には裕一さんがいる…

放心したように宙を見つめる枇南子。

やがて、枇南子の携帯電話が鳴り出す。

枇南子

もしもし… 裕一さん！ 久しぶりね。あなたの声を聴くの6年ぶりだわ…（間）いいの、いいのよ。みんな毎日のことで精いっぱい。お互い様よ。それより体は大丈夫？ ずいぶん働いてるみたいじゃない。（間）それがね、もう出かけてるのよ。私も話さなきゃと思ってるんだけど、起きた時にはもういなくてね… 昨日もなの。待っていたんだけど、私は十一時には眠らなきゃならないものだから…（長い間）ちよと待つて！ あなた達が一緒になって二〇年くらい？ 私の知る限りこんなことは一度もないはずだけど、あった？ だから、陽花が家出したことがありましたかって言ってるの。（短い間）だったら余程のことよ。そう考えるべきでしょう？（間）あのね、震災から一度も帰ってなかったのよ。あの陽花がよ！（やや長い間）離婚届があったの？ ちよつと、落ち着いて！ 陽花が離婚を考えたとしても、あなたを嫌いになったからじゃないと思うわ。（間）それはわからないけど… ねえ裕一さん、陽花としつかり話をしてあげて。あの子はワガママなところもあるけど、必要な努力はするし、あなたのことが（本当に好きなのよ。）ちゃんと話を聴いてあげて。（間）でも体を壊したら元も子もないわ。（間）そのうち体を壊すわよ… ね、私思うんだけ

ど、ご両親はほんとうに家を建てて欲しいと思ってるのかしら？ 怒らないでね。あなたの気持ちはわかってるつもりよ、でもね… キャッチ？ キャッチって？ (間) わかった、とにかく連絡するように言うわね。(電話が切られた様子)

いつの間にか、陽花が立っている。

枇南子 (微笑む) 裕一さんよ…

陽花 (アルバムを見て) うわぁーこれ見るの何年振りだろう… お母さん若いなー あたし可愛い！ (見入っている) ほんと、どれも全部可愛い！ (一枚の写真に目が留まり) ねえ、これお姉ちゃんいくつ？

枇南子 どれ？

陽花 これ、ガクアジサイの。

枇南子 九才か… 十歳くらい？

陽花 っていうと三年生？

枇南子 そうね。

陽花 (再び見て) 最近の子とは違うよね… すごくしっかりした顔してる。意志的というか… あこれ！ これ好きだったなー

枇南子 どれ？

陽花 これ、黄色いクマさん。

枇南子 (笑う) ずっと耳持ってるから黒ずんできちゃってね…

陽花 お姉ちゃんが、綺麗にしてあげるって漂白剤につけてシロクマになっちゃったのよね

枇南子 お姉ちゃんが悪いって泣いて怒って… 口利いてくれなくなったのよね。

陽花 ……あの時は何年生？

枇南子 五年生。

陽花 五年生か… あたし、ひどいよね。お姉ちゃんだって、まだ子供なのにね。…ごめんね。

枇南子 ……どうしちゃったの？

陽花 ケアマネさんに会ったの。

枇南子 篠原さん…？

陽花 （うなづく）

枇南子 なにか言ってた？

陽花 お姉さん、調子はいかがですかって言われて… あたしなんにも知らないから、姉なら父親を施設に入れてボランティアに精を出してるって…

枇南子 （苦笑） 篠原さん、驚かれたでしょうね。

陽花 「ものすごくビックリした顔して、お姉さん、やっとここまで回復したんですよって…

お父さんがここに入った後、ずっと家から出られなくなってたんですよって…。

枇南子 そう。

陽花 それでお茶に誘ってくれたの。

枇南子 そう。

間。

陽花 ほんとうなの？ お父さんが街を徘徊したって…

枇南子 …ほんとうよ。

陽花 お父さんが暴れてお姉ちゃんにケガさせたって… ほんとうなの？

枇南子 病気のせいよ。病気がそうさせるの。

陽花 どんな怪我？

枇南子 ……

陽花 どんな怪我をしたの？

枇南子 腕と鎖骨を骨折したの。あとは火傷。

陽花 どうして火傷？

枇南子 ……

陽花 どうして？

枇南子 ヤカンがね…

陽花 ヤカン？

枇南子 当たったの。

陽花 ……投げられたってこと？

枇南子 ……

陽花 お父さんが投げたんだよね？

枇南子 お父さんはね、お母さんに会いたくて… 会いたくて会いたくてたまらなくなつてたのね。

陽花 ……

枇南子 だから私がお母さんと同じようなことをするのが辛くなつたんだと思う。同じような格好で、同じ道具を使って…

陽花 そんなの… 勝手すぎるよ！ お姉ちゃんが仕事を辞めるように仕向けたのはお父さんじゃない！ 辞めたくなくなつたんでしょう？ あの時お父さんまだ七十一よ。自分でやれることだつていっぱいあつたはずなのに、それまでと同じ生活したいもんだから…

枇南子 でもお父さんは仕事の多い人だったから…

陽花 （遮る）もうやめて。

枇南子 ……

陽花 あたしわかつてた。うちの家族はみんなそれぞれお姉ちゃんに甘えてるんだって… 少しずつお姉ちゃんに寄つてかかって成り立ってるんだって…

枇南子 ……

陽花 たしかにお母さんは体が弱かつたけど、お姉ちゃんがしつかりしてるから甘えてるとこもいっぱいあつた。

枇南子 私がそうしたかつたのよ。お母さんに長生きして欲しくて、なるべく疲れさせないようつて… だからお母さんが死んだ時、どうしていいかわからなくなつて… お父さんがショック受けたように、私もものすごくショックだった。

陽花 ……

枇南子 自分の将来とか、これからどう生きるとかちゃんと考えないまま、お父さんが望むなつて… 仕事を辞めたの。それが一番の間違いだったと今はわかる。

陽花

あたしね、あたしすごく勝手な言い方かも知れないけどね、お姉ちゃんのためにも、自分が早くこの家を出た方がいいって思ってたのよ。そうすれば少なくとも私はお姉ちゃん甘えなくなるからって…

枇南子

（驚く）そんなこと思ってたの？

陽花

でも却ってお姉ちゃんの負担を増やしちゃった。お姉ちゃんが教師を辞めるなんて考えなかったもん。お父さんがもう少し自分のことをやればよかったのに！ お父さんって立派な人って思われてるけど、ちょっとインチキくさいところあるよね。

枇南子

…

陽花

男女同権とか女性の社会進出とか、推進派みたいな顔してたけど実はよく思っていないフシがあるもん。

枇南子

あの世代にはよくあることだけどね… ね、お父さん、あなたのことちゃんとわかった？

陽花

わかったわよ。嬉しそうだった…

枇南子

（安堵して）そう。

陽花

（少し間あって）福島なんか行くな…

枇南子

え？

陽花

お父さんがもっといい男を探してやるって、福島の子とは別れるって…

枇南子

…昔に帰ってるのね。

陽花

あーなんかもうお父さんと会うの嫌になってきちゃった…

枇南子

大丈夫！ 私からちゃんと話すから。

陽花

…

枇南子

考えたの。お父さんが生きているうちはここは売れないけど、土地を担保に銀行から融資を受けることはできると思うの。そのお金であなた達の新しい家を建てればいいと思うの。

陽花、呆然と姉を見つめる、やがて枇南子の傍に寄り、抱きしめる。

陽花

ごめんね… ほんとうにごめんね。



枇南子 どうしたの？ 大丈夫よ。何とかするから心配しないで。

陽花 違うの！ あんなの本気で言うわけないじゃない！ そんなこと考えてないよ。裕一が倒れたってここを売ろうなんて思わないよ。

枇南子 そうなの…？

陽花 そうよ！

枇南子 売らなくていいの？

陽花 当たり前でしょ？ お姉ちゃんしっかりして… ううん、しっかりしなくていい！  
ほんとうの気持ちを言っつて！ もうしっかりしないで。

枇南子は、なんといいのかわからず、もじもじしてしまう。

陽花は、少しだけ何かが吹っ切れたような気持になっている。

陽花 大丈夫！ 私だってもう大人だから対等でいいのよ。だから無理しないで、なんでもほんとうのことを話して。頼りにならないかも知れないけど、でもお姉ちゃんの力になりたいと思ってるんだから。

枇南子 ……ありがとう。

陽花 病院行ってるの？ 精神科みたいな…

枇南子 いいお医者様に出会ってね、心療内科なんだけど、そこで薬をもらってるの。

陽花 どんな薬？ 安定剤とか？

枇南子 安定剤はもう飲んでないの。一応お守りみたいに持ってはいるけど、飲んでない。でも眠るための薬はね… 飲まないと眠れないの。

陽花 ……大丈夫なの？（遠慮がちに）ほら、癖になって手放せなくなるとか… 色々聞くじゃない？ 恐くない？

枇南子 （微笑）眠れない方がよっぽど怖い。

陽花 いつから飲んでるの？

枇南子 お父さんが歩き回るのがひどくなった時だから… 四年前くらい？ 私も気になったの。陽ちゃん病院は？

陽花 ……？

枇南子 通ってたでしょ？ 仙台の病院に…

陽花 震災で終了よ。続けられるわけない…

枇南子 そうだね

陽花 ちよこちよ着床はしてたのよ。でも流産しちゃって…

枇南子 ……つらかったわね。

陽花 いいの！ 不妊治療ってものものすごくお金かかるし、あたしたち共働きで、家賃が  
いらなからできたんだもん。

枇南子 そうね。

陽花 （微笑） そんなにうまくはいかないよね。

枇南子 新しい幼稚園は？ 辞めちゃったの？

陽花、すぐには応えられない。

陽花 （溜息） あたしだってポスト副園長くらいの感じだったのよ。でもさ、新しいとこに  
はそのやり方があるし… 一回りも年下の子に命令されたりして、なんか我慢でき  
なくて… 昔はそういうの上手くやれるタイプだったんだけどなー

枇南子 色々あったからよ。

陽花 でもまた探す。仕事する。そしたら毎回は無理だけど、月に一回くらいはこっちに来  
て、子ども食堂ができるもん。

枇南子 手伝ってくれるの？

陽花 言ったでしょ、力になりたいの。

枇南子 ありがとう。

陽花 なんか楽しくなってきた。

枇南子 （思いついて） ね、来週の土曜までいられるかしら？

陽花 なんて？

枇南子 久しぶりにふたりで読み聞かせをやらない？ 子どもたちに聞かせたいの。

陽花 いいわね！

枇南子 でもそんなに引き留めたら裕一さんに叱られるわね…

陽花 いいわよ、叱られても。(考えを巡らせている) なに読む? ぐりぐらは? ホット

ケーキを読んで、ホットケーキを出すっていうのは? 喜ぶんじゃない?

枇南子 喜びそう! あれカステラだけど…

陽花 あれは? あれ!

枇南子 あれって…

陽花 お姉ちゃんのオオカミとあたしの三匹の子ブタ!

枇南子 あれね! できるかなー(と、オオカミの声を出そうとしてみる)

陽花 (立ち上がる) ちよつと見てみようよ。上にある?

枇南子 全然整理してない。すぐ見つかるかな…

陽花、弾むように部屋を出て行こうとする。

陽花 (小さく歌いながら、枇南子を振り) ララララ あひるさん… はいっ!

枇南子 ……はい?

陽花 (大きく歌う) ララララ あひるさん…

枇南子 があがあ…

陽花 アヒル、年取ってるなー もう一回! ララララ あひるさん…

枇南子 (立ち上がり、陽花を追う) ガアガア!

陽花 ララララ 山羊さんも…

枇南子 めえー

陽花 最初からね!

二人、部屋を出て行く。

陽花 丘を越え行こうよ 口笛 吹きつつ

枇南子 空は澄み 青空 牧場を 指して

陽花 歌おう

枇南子 朗らかに

陽花・枇南子 共に手をとり ランラララ ララララ

陽花 ララララ あひるさん

枇南子 ガアガア

陽花 ララララ 山羊さんも

枇南子 メエー

陽花・枇南子 ララ 歌声合わせよ 足並み揃えよ 今日愉快だ

春の日差しの中、朗らかな二人の歌声が聴こえ、遠ざかっていく。  
テーブルの花が、その部屋を見守っている。

— 幕 —

※挿入歌「ピクニック」 作詞 萩原英一 作曲 イギリス民謡